過ちを繰り返さないために

宍粟市立山崎南中学校　二年　松岡　稔音

岡山県瀬戸内市。街から見える瀬戸内海は日本のエーゲ海といわれており、豊富な海の幸、かんきつ類の栽培も盛んで、海に沈む夕日はとても幻想的です。そんな瀬戸内の海に浮かぶ美しい島々の一つに、かつて国の政策によって隔離されていた長島という島があります。本州からわずか三〇メートルしか離れていない島です。現在は橋が架かり、自由に行き来することができますが、橋が架かるまでは簡単には行き来することができない島でした。

皆さんは、ハンセン病という病気を知っていますか。「らい菌」という病原菌が皮膚や末しょう神経を冒し、目、鼻、のど、口などの粘膜、一部の内臓にも病変が生じる病気です。らい菌を発見した医師の名にちなんで、ハンセン病という病名が用いられています。日本では不治の病、遺伝する病と言われ、古くから恐れられていました。実際には感染力は非常に弱く、周りに感染することはほぼありません。今では治療薬も開発され、確実に治る病気です。そんなハンセン病の患者が入所する日本で最初の国立ハンセン病療養所が開設されたのが、長島です。一九五三年に日本で制定された「らい予防法」では、治療薬が発見されていたにもかかわらず患者を強制的に療養所に隔離し、回復しても社会復帰は遠ざけられていました。「長島愛生園」には、多い時は二千人以上が入所し、現在も一二四名が暮らしています。

私は、父に連れられて何度か長島を訪れたことがあります。療養所での交流会に参加し、お菓子を食べながら入所者のおじいさん、おばあさんとお話をしました。病気の後遺症で顔や手に変形が残っている方々でした。二人は、私を孫のように喜んで迎えてくれました。子どもを温かく迎えてくれるのは、子や孫がいないからです。いないというより、持つことができませんでした。子どもを産んではいけないと、国の法律で定められていたのです。また、赤ちゃんが来た時は、抱っこすることをためらわれるそうです。治っていることは分かっていても、これまで受けた差別や偏見によって、そのような思いになられるようです。

二〇〇五年には、全国の療養所で何十年も瓶に入れられたままだった胎児や新生児の遺体とみられる標本が一一五体発見されたことも、父から聞きました。なんてひどいことをするのだと心が痛みました。ごく最近になって「らい予防法」がようやく廃止され、国が隔離政策の過ちを認めて謝罪と補償が行われ、家族にも同じ苦しみを与えたとして国が責

任を認めたことも教えてもらいました。ハンセン病の問題は決して昔の話ではなく、間違った認識や差別心のために、今でも苦しんでいる方々がおられるのです。もしハンセン病のことをよく知らない人がおじいさんやおばあさんの変形した顔や手を見たら、現在の社会でも差別的な態度をとる人もいるかもしれません。おじいさんやおばあさんはこれまでずっと差別を受け続け、生きるのもしんどくなるくらいのつらい思いをしてこられたのだと思うと、どうしてこんなことが起きているのだろうと悲しくなりました。

長島と本土をつなぐ橋は、「人間回復の橋」と呼ばれています。本土からすぐ手の届く距離にありながら、長く社会から隔離された療養所と本土が自由に交流できるようにと架けられた橋です。ハンセン病の患者さんやその家族の方たちは、長い間、多くの偏見と差別に苦しんできましたが、島と本土がようやく橋でつながり、隔離時代の終わりを象徴するものとして「人間回復の橋」と呼ばれるようになりました。今、世界では新型コロナウイルスの影響で人と人が分断されています。感染によって、回復したとしても周りから責められ、そこに住めなくなるということも聞きます。そのような差別や偏見が起こるのは、病気について正しく知らないからです。私は、おじいさん、おばあさんとの交流や父から教わったことで、ハンセン病について知ることができました。過去の出来事から学ぶことは、ハンセン病だけでなく、この先に同じ過ちを繰り返さない社会をつくることにつながるはずです。差別されている人たちが人間として回復するのではなく、すべての人が正しく知ることによって差別をなくし、互いの人間としての関係を回復させていかなければなりません。「人間回復の橋」は、偏見や差別によってできた人と人との心の隔たりをつなぐ橋なのだと、私は思いました。

その橋を渡って、長島のおじいさんとおばあさんに会いたくなりました。そして瀬戸内のきれいな海を、もう一度一緒に見たいです。